

「脳活動の見える化」でうつ病診断に貢献

人間の高次の精神活動を支えている脳という臓器の表面には沢山の皺が有るが、この部分は多数の神経細胞が集まっていて、その活動状態に応じて酸素の消費、血流量が刻々と変化している。脳の中でも特に額の辺りに位置する前頭葉と呼ばれる領域は思考、感情や意欲といった精神活動に関連する大事な領域だが、うつ病などの精神的な疾患では働きが低下すると考えられている。

光トポグラフィーは近赤外線という生体への透過性が高く頭蓋骨を通り抜けることができる特殊な光を頭皮から脳に照射することで、部位ごとの脳表での酸素の消費状況の変化（＝脳活動）を調べる検査である。

従来うつ病診療では、診断、治療に際して、患者・家族や医師の主観がどうしても混在しがちな問診による情報に頼らざるを得ない面が大きく、直接、脳の活動状態を評価して診療へとつなげられる客観的な検査、指標が乏しい状況にあったが、平成21年4月から先進医療として「光トポグラフィーを用いたうつ症状の鑑別診断補助」が認可され注目された。平成26年4月からは保険適用となり、より身近な検査となっている。実際の検査では、例えば「か」で始まる名詞を可能な限り沢山言って下さい」といった課題を行っている際の脳血流の変化を調べる。

気分の落ち込みや無気力といった「うつ」の状態は、一時的には、誰でも経験し得るもので、治療を必要とするまでには至らないことも多いと考えられるが、中には経過が長引き、治療を受けても改善が乏しい場合も散見される。その様な際には、診断や治療を今一度、見直してみることも一つの方策となる。

双極性障害（躁うつ病）や統合失調症でもうつ病と類似の症状を示すことがあるが、治療法は異なっており、疾患に応じた治療薬の選択が症状改善のためには重要となる。光トポグラフィー検査はこれらの疾患とうつ病の鑑別診断に補助的な情報を提供し得ると考えられているが、同検査の実施が可能な施設は今のところ、県内では琉球大学医学部附属病院だけとなっている。

（精神科神経科 外間 宏人）

問い合わせは診療情報提供書を本院医療福祉支援センター（シエント）まで。

電話098（895）1371、FAX098（895）1498。

